
jiu

かいじゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

j i u

【Nコード】

N 4 8 4 4 F

【作者名】

かいじゅう

【あらすじ】

変な世の中だ。人種があふれ消えた。全てがなくなるまえにぼくは違う世界に行く、逃げたんじゃない。ここがぼくの居場所じゃなくなっただけだ。そう弱虫なんです。

はかなくない人の旅（前書き）

へんな肝で作っていますの、で文章が読み取りできないところがあるかもしれません。

即座に苛立ちをあらわすのは結構です。べつにイタカユクも無いことも無いね。

はかなくない人の旅

朝日が昇るそれでもあたりは暗かった。

なんでも想像どおりになればいいのに、考えたことの無いものまであるところ。

それを作るには、外に出るか、もうひとつ別のところへ行くか。外に出るにはしたくがいる。

それがめんどくさくて、彼はベツノトコを選んだ。想像しないものまであるところ。

2068 へんな年で世界改革がはじまった強国が支配国によって潰される。反抗期だ

そのせいだつて言うんじゃないけど、いろんなじんしゅが生まれた。戦闘タイプ。これが最初の新生児。戦乱になると自我を忘れて戦つていつの間にか死んでいるタイプ。かわいそうだが

顔面からしてそんな感じた。

頭のいいやつは少なかったけど特殊っぽいタイプはいた。体が弱く空気では3年しか生きられない。だからかかぐや姫並に成長が早い。死ぬコ口には25年すぎ生きた見た目になっている。言葉を使わない彼らは利口だよな。

いつまでも成長しない逆なやつもいたし、空をとんでいちゃうものもいた。

そうゆう新生につながるキーワード改革10みなすべて10年以内にいなくなる。

どこへ逝ったのか、分からないやつが多い、母親は気の毒だね。

で、れいがいの話。

まあ120種類あるといわれた新生ズだからイシュぐらいは普通変なやつが要るだろう。

生きのこちやいましたってな、まあその人種がカリフレシアというやつで顔がみんな同じの

気持ちのいいやつら。でも10年間で11人が逝ってしまい。残るは2人。

そいつらの話はまた今度にしたい。まあ大変だったんだ。ね

おれもその年生まれみたいだから、入用なときにあたらなくてすんだ。戦争時代に。

誰でも彼で借り出されて今でもいやな思い出だ。10年つづく長い戦争、もちろん死者ぞくしつた、へんなものを食べて、変な動物も殖えた。顔面蒼白みたいなアニマルズが戦争に加担し

どんどん戦乱は深まるばかり。とめようも無い戦争がおわったのはタイムリミットがきたからで、その説明もおいおいにな。

まあ必要なことは最低限話したし、そろそろ出かけてもよかり。さあ旅……。

爆発とともに地面がわれたこれじゃあたえ凌げない。新しい小屋をさがしに行こう。

外ではバン銃の音が悲鳴を上げさせている。どうやら遊園地のような。そんなわけは無いのだ。はやく逝かなくてはいけないらしい。穴に飛び込む、怖いなんていつてられないのか、さあ急げあのアニマルの餌食になる前に。

逃げ込んだ世界1

腹が空いた。かまわず進む、そもそも言葉もおかしい。

空腹なんてかんじたこと無いくせに、自分の中に声がする。

なんと理想的だろう、本との自と対話できるなんて、しかし一人で旅に出たはずなのだ。

なはずだが・・・さつきから生まれてから129回目のストーカー被害にあっている。

後ろからなにかがついてきている。俺に相棒なんて要りません。

——をなくした時に神にそういったのに、

ザッ

勢いよくまわれ前じゃないほう。

おや小さなガキじゃないか。反応がないなびくりとも、ぱちりもしない。

おーい俺はそんなに優しそうにみえるか。

話しかけたほうがいいのだろうか、わからん。

「おい、がき」

返事が無い耳無か、

うちの田舎にはよくいたけど。艶藤という幼馴染いやつだよ、死

んだけどね

それより。

「お前のなまえは？身長は。胸囲は。年齢、田舎、友達は？」

がきがっこうゆう。

「agy t。ひやくにじゅうはっせんち、不明、不明かな、滅んだ。

お前」

はあ。

てか名前が聞き取れなかった。この集落の言葉か。集落なんて無いけど・・・。

「one more」

英語分かるかねえ。わかんないか？

「あぎゃと、ひやくにじゅうはっせんち・・・」

「あ、あぎゃと・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

あぎゃとありえん名前だね。嘘つきなんじゃないか。こいつ、こんな善良な少女否少年をだますなど言語道断、われ——サマが成敗してくれるわ・・・

「阿木でいい、よ。」

「あぎ？可愛いね。」

女の子を示すが彼は女の子かな？もしかしておとおんなのこ？。

「わたしはカワイイという言葉ツカワナイ・使う、残酷な餓鬼・・・

」

「なんだそりゃ、お前そんな風に呼ばれてるのか。」

てゆうより。。。なんで片言になったんだ。。。。

かおがこわばるこいつは人で無いかもしれないね。はははーしぬかも。

「ひと埋葬する、そのとき臓器もらうそれ食料とし、分け与える。民衆食べる」

「人肉を調理していたのね。」

なるほど。なんかいいんじゃない、怖いね。

子供にさせないと食べられない・・・死んでしまえみんしゅうさん、うざいよ。

「その言い方、好き。でも私肉とゆう、みんな怒る殴るイタイ。ころころつ。。っあ」

なんか暴走してるね、このひと可愛いけどヤミみすぎ。可愛そうにうまくしゃべれなくなるよ。僕みたいに。

かつこつけてても誰も見てないし、この人諫めましょうか

「殺したいね。」

小人の口からよだれがたれる。

「そう、そうね。殺したいね。」

いや最近のひとはみんな狂気で怖いね。まともな人しか居ないところもあるんだが、

そんなところにゃ、、、興味ない。

「でも」

小人さんのあえぎ？？がとまり僕に視線が集められる。一人だけど。なんか言わなきゃ。

「殺すんなら、逃げるほうがいい。」

「どうしてなんですか。ころ・・・」

「ひとをころすと人じゃなくなる。あんまりいいもんじゃないよね。」

「正論だな、久しぶりに、おれかうんせらにでも向いてるんじゃない。」

「・・・弱虫になれというんですか、俺の天使は。」

「は。天使。。なんですかそれ」

「なんでもない 気にしないでくれ、それより人肉取りに行こう。いしょに来て欲しい。いいか？」

「なんかいきナシ誘われたよー。きついよー、逆何いつもと友達にもさわれたの無いくせに。」

「こんな小人と一緒に食料取りに行く気が。」

「はい。」

「まあ、こうゆう人なんだな、私は誘いに弱い。」

はかなくない人の旅（後書き）

読んでください。ね

きぶんがいいね。したいがまじかにある。阿木はすごく頑張つて骨と肉をつかんでいる。

初回だし手伝わなくてもいいよね。もう一生ここにもこない、吐きそうだし僕気持ちがいい。

「手伝わなくていいよ。」

お親切に阿木ちゃんが声をかけてくれた。ちゃんやかあら、女の子かつて思つた人・

まだ分かんないんだな。きついでしょ。情報が少なくて、僕はなれるからな説明がうそのようにはなし。

「そうさせてもらいます。これから、たぶんね。」

かんじ悪く聞こえたかな？そんなこと気にするなんてお年頃、はー。

辛いね暇をもてあますの。

「しなくていいんですよ。明日には僕もあなたもこの町に居ないんですから」

「はー、そうなんかね。初耳ですが。」

「あなたがなにを選んでも運命はかわる。」

急になにをゆうんだこの少年 改め 阿木。 なにか悩み事があるなら相談乗るので

変な方向にはしらんでくださいよ。阿木とは長い付き合いは避けたい。

「それはびっくり。 俺意外と自由に生きてるからかねえ、運命が・」

「変わるのですか、気にしないでいいです。いつか実感しますから。ぜんぶそのうちおこりまし。」

なんだかしつかりしたいも弟を持った気分だね。性別不明は最終まで引つ張りたいな。

まあ途中でねたばれなんてだれも望まんし。

「そもそも、君は僕とどんなかんじ関係になりたくて、ここに連れてきちゃったの?。」

「これから三週間はさいていでもいつしよ、そんな関係になりたいですね。」

ちやくちやくと骨と肉の分離をしながら朗らかなこえではなす無表情の阿木は残酷だ。

これを執行させている大人の寄生虫につくづく嫌気と腹が立ったり座つたりしますね。

僕には出来ませんよ、 あんな残酷無垢な作業・・・ね。

「残酷女神に質問です。」

「その呼び名は好きです。」

「なんで三週間分のうんめいを知っているのかね。めえ。」

過去のこと語られないといいな長くなるし、気持ちが悪くなるし、こう死にたくなるし。

まあこれから阿木がちよつと語ります、、、

どうぞ。

「一日前神じゃない大人に悟られました、人肉なひびが嫌いなことそして、彼女は言いました。死に絶えそうなやつれた風、勇者が憂鬱の仮面。かぶって

キツと狂って、あのごめんなさい。この町につくらしいって、それを信じてないと死んでしまいたくなくなるような気が、怖くなつて

いつでも唱えていました。

勇者じゃない人が私を助けに来る。ここに」

最後のにもじは彼女彼氏の表情が無いため付け足しましたよ・・・。

「かつこいい勇者じゃない人でうれしいです。」

阿木は文字だけ見てると子分のこみたいだねえ。

そんなものいらないけど。一生そんな器にはなれませんかでしょうね。なんていつてる間に阿木の能弁よりしゃべり倒しまして。あーー

「ー。申し訳ないねえ

嘘つくよりましでしょう。

「いつ出発しようか。」

「いつでもいいですよ、僕は元気です。」

「一緒に連れて行っていいんでしょう。」

「ええ。もちろんです……。一緒に連れて行ってください。ねえ・・。」

「心配しなくても大丈夫。断絶なんてしない。」

そう　旅に道ずれ　なんていらないけど彼女彼氏の阿木をこの偏屈な村に追いてくのは可愛そうだ。なんて劇的なんだ。

こんな少年少女と出会うなんて、これ以上はいらないけど。

多すぎるなって思うほど仲間できませんように。

なんて神様にたてつきたいな。なんつつてね。

そんな恐ろしいことしませんよ。

「今日には出発したいです。はやくはやく。」

そんなにせかさないでくれよ。僕もそんなに早足やだよ、ゆっくり行かしてください。

急いでないんで。お願いしますよ。

「そうかい、じゃあ一人で行くといいよ。」

「どうしてですか、つれつてくれるっていったじゃないですか。」

そうなん。急にさめてしまった。だめな大人です。僕はおとなっちなんで……

そんなに出たいならこの町をかってに行くといいよ。一人で。詰んないんで黙ってました　そりゃいらいらするよね女男の子だし。

感じいい人目指してるのに

「わたしを連れて行ってください。お願いします。」

頭を下げると思っていたのに立ちんば　無表情ですか感心しないな、

そうゆう可愛げないの

ぼくは渴きがある子が好きですよ。

「だっていそいでるんでっしょ。」

ぼくはそんなに急いでないんですよ。 ゆったり間たつぷりです。

「急いでなんか無いです。」

「。。。。。。。。。」

「ゆっくりでもいいですよ。」

「笑えばいいのに。かわいいから。」

ほめてるつもりは無かったけど、言葉はいい。

「にこ」

「そい」

三部・町での会話

阿木と一緒に町まで来て 思い知った。この世界は普通だ。店や人がうごめき、耳にうるさい声が響いている。

阿木は始めてみるものに怯えていた。人間の群れだ、買い売りに必死な人々も見受けられる。 うん。いい町並みだ。

阿木はうるさいこの場所に居たくないようだ。

阿木「もう。早く静かな所へ、行きましょう。」

阿木にしてはまともなことを言う、あんな異端なところで日々を生きていても

頭はまともなのか、 俺よりいい人間に見えてきたね。

俺「そうだねえ、どこに泊まろうか。」

阿木「トマル・・・?」

俺「ここの来る途中でいいトコみつけたか?」

阿木「あのお、トマルって何ですか?」

阿木がいつもと同じ無表情な顔で俺を悩ませている。

俺「自分の家でないところに、少し快適に一時的にすむってことかな、」

俺はこういう端的な説明で着ないタイプのやつなのに、こんな子に

教えても平気か。

阿木「トマル stay ってことですか？」

俺「・・・まあ、違っちゃ居ないね。なんかね・・・stay overnight・そんな意味。」

阿木「夜を明かす小屋・・・？」

俺「ん。」

阿木は語学力があるんかね、国超えることがありそうだから、言葉でも教えてみようかね。そのうち本でもやるか。

俺「この世界に金はあるのか？」

無かったら良いんだけどな。

阿木「ありません。」

俺「じゃあ何で市場があるんだ。」

阿木「自分の有益になる物がてに入るかもしれないからです。」

俺「じゃあ、何で金という言葉を知っているんだ。」

なぜ泊まるを知らなかったか、阿木ちゃんの生まれ育った、環境ではその言葉が要らなかったからだろう、金はあるのかね？

阿木「・・・・・・・・・・・・・・・・この世界の裏側に金で生きている世界があるといわれています。それはみんなが知っています。」

俺「その話の内容は？」

阿木「よく知りませんが、そんな物体、つまり、金で動く世界なんて・・・・はしたないという、この地上は優れているという話です。」

俺「たいした話じゃねえな。お前は誰から聞いたのかな？」

阿木「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

阿木は悲痛な顔をして立ち止まる。おれは一瞬振り返ったけど、何も言葉が浮かばなかった。

俺「さあ 宿を探すか。」

眠くは無い。腹も空かない、なぜ宿を探すのか自分が一番分からな
いが、まあ阿木もいるしいいか。

人魚の宿

阿木と並んで歩いていると、視線が後ろから突き刺さる感じがする。それは阿木が普通という姿をしていないからだ。

阿木の肌は雲のように透けていて、栄養失調の天使のような肌色であり

阿木の髪は薄気味悪く光る赤褐色でなんとも、・・・マグマのようにぐねっている。

阿木のビジュアルはこの世界では高く賞賛されるようで、汚れた人間が阿木を横目で除いている。

つまり阿木ちゃんはモテモテのようで、僕は感心しています。

阿木「宿はどこにあるのですか？」

阿木の声は低く、俺を安心させる声である、いいね。

俺「もう少し歩いたら見つかるさ。」

あてのない返事をしたが阿木は納得してようだ。

二人並んで、大通りから外れたわき道に入ると、不思議な女が声をかけてきた。

女「私は人魚、貴方の悪夢を食べるバク。」

俺「あいにく、まだ残しておく必要のある夢しかない。あと生臭いのは嫌いだ。」

女のすぐそばで猫が鳴きながら女の足にじゃれ付いている。

魚の匂いでもするのか？

女「今夜寝る予定はあるのか？」

寝る予定？休む場所があるのか？とっているのか？

俺「ああ。」

女「じゃあ、宿につれていっていいか？」

俺「おまえ、宿を知っているのか？」

女「私の経営している宿があるの」

この女宿主だったのか。まあ、いい。変な女にはついていくのが俺の道理。

俺「今夜はこの女の宿に止まらと思う。」

阿木に了解をもとめる。

阿木「はい。」

普通は、不安がるのかもしれないが、それより泊まる場所がほしいらしい。

素直でいいことだ。

女に案内された宿は

真っ黒い概観で、細長い形をしていた。

屋根に近い壁になにか書いてある

M e r m a i d ' s h o t e l

人魚の宿、この女主、人魚に執着があるらしい。

女「私の宿だ、さあ入ってくれ。」

俺と阿木は女に続いて宿に入った。

宿の中は水色と紫色をすべてにぶちまけたような色をしていて床と壁と天井の見分けがつかない。

女「あんたたち、同じ部屋でいいよね？」

阿木「はい。」

俺が決めることじゃないし。阿木がいいなら、まあいいか。

俺「この街の金を持ってない。食料を代金として受け取ってもらえないだろうか？」

女「代金は要らないわ。」

俺「なぜ？」

女「ここには、人魚がいるの。この宿はその人魚に珍しい人間を見

せるためにある。」

俺「そうか」

阿木「・・・人魚は自分にもみえますか？」

女「あんたたちには見えるかも。二人とも珍しい人間だから。」

俺「阿木はともかく、俺は・・・」

女「あんたは、珍しいわ。この国にあんたの目の色の男はいないもの。」

俺の目の色？自分では見たことがない。わからんな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4844f/>

jiu

2011年1月18日02時59分発行